O 063

当院の血液疾患に発症した侵襲性肺真菌症の臨床的検討

[1] 亀田総合病院　呼吸器内科、[2] 亀田総合病院臨床検査部

○中島 啓[1]、大塚　喜人[2]、山脇　聡[1]、高井　基久[1]、宗像　　優[1]、小林　玄機[1]、桂田　直子[1]、浅井　信博[1]、牧野　英記[1]、三沢　昌史[1]、金子　教宏[1]、青島　正大[1]

【背景・目的】侵襲性肺真菌症は、宿主の免疫能低下に伴う予後不良の日和見感染症である。今回、血液疾患に発症した侵襲性肺真菌症の臨床像を評価した。【対象と方法】2009 年 4 月から 2012 年 3 月までに当院血液腫瘍内科に入院中発症した侵襲性肺真菌症の 19 例を対象に患者背景、治療、予後を後方視的に検討した。侵襲性肺真菌症の定義は次の A もしくは B とした。A:EORTC/MSG 診断基準の proven に該当するもの、B:以下の 1 と 2 の両者を満たす、1:probable もしくは possible に該当、1:血液腫瘍内科専門医 1 名、呼吸器内科専門医 1 名の両者が侵襲性肺真菌症と判断。【結果】平均年齢は 65.8 歳（34 歳～83 歳）、男性 13 例、女性 6 例。基礎疾患は白血病 11 例、悪性リンパ腫 6 例、その他 2 例。EORTC 診断基準は proven が 1 例、probable が 9 例、possible が 9 例。検出菌は経気管支肺生検による病理診断で接合菌が 1 例、喀痰培養で *Aspergillus fumigatus* と接合菌を検出したものが 1 例であった。Grade4 の好中球減少を認めた症例は 12 例で、診断時好中球数は 250/μl、G4 好中球減少日数中央値は 14 日。血清βD グルカン値が 5pg/ml 以上の症例は 1 例のみで、血清ガラクトマンナン抗原陽性例は 4 例、喀痰ガラクトマンナン抗原陽性例は 13 例。画像所見は全例で結節陰影を認め、ハローサイン陽性は 13 例。使用抗真菌薬は VRCZ が 14 例、L-AMB が 6 例、MCFG3 例で、使用日数中央値は 56 日であった。βラクタム系抗菌薬併用例は 18 例、ガンシクロビル併用例は 2 例。入院期間中央値は 90 日、30 日以内死亡例は 2 例（10.5%）、全死亡例は 5 例（26.3%）であった。【結語】当院で侵襲性肺真菌症と考えられた症例で proven は病理で接合菌を検出した 1 例のみであったが、probable や possible の症例も早期治療介入により予後は比較的良好であった。侵襲性肺真菌症は、治療が遅れると致死的になる疾患であり早期に治療を開始することが重要である。

O 064

マラリア診療において診療開始の遅れが重症化に及ぼす影響－過去 20 年間に診療した 34 症例の検討－

[1] 京都市立病院　感染症内科

○中山 桂[1]、山本　舜悟[1]、篠原　浩[1]、土戸　康弘[1]、中島　隆弘[1]、清水　恒広[1]

【目的】本邦における輸入マラリアの動向と当院でのマラリア診療状況より，診療開始の遅れがマラリアの重症化と転帰に与える影響を検討する.【方法】対象は 1991 年から 2010 年の 20 年間に当院で治療したマラリア 34 症例（熱帯熱 16 例，非熱帯熱 18 例）．WHO 基準に基づき重症マラリアを診断し，患者毎に評価した重症化リスクを前半と後半の各 10 年で比較した．治療アウトカムは入院日数とした．受診及び治療開始の遅れについても検討した.【結果】当院ではこの 20 年で 34 症例のマラリア患者を診療し，うち 日本人患者は 27 例，80％以上が流行地からの帰国後に発症していた.前半と後半を比較すると，後半 10 年では三日熱マラリア患者が減少し，熱帯熱マラリア患者が増加していた（Fisher's exact probability test , $p<0.01$). また，後半 10 年で重症化リスクの高い症例の増加はなく，入院日数の延長も認められなかった（前半 11.3±5.0 日， 後半 9.3±2.6 日， Mann - Whitney U test, $Z=0.74$, $p>0.46$）．受診と治療開始の遅れを検討したところ，受診までの日数は後半 10 年で短縮していた（前半 6.1±5.3 日， 後半 3.3±2.4 日， Mann - Whitney U test, $Z=2.00$, $p<0.05$). 治療開始までの日数も後半で短縮する傾向が見られた（前半 8.6±5.4 日， 後半 6.0±4.7 日, Mann - Whitney U test,$Z=1.66$ ， $p<0.1$). 【結論】当院のマラリア診療状況からすると，重症化しやすい熱帯熱マラリア患者が最近 10 年で増えているものの,発症後患者はより早く医療機関を受診し,初療医師も早期に専門機関に紹介するという傾向が認められ，この結果，重症マラリア患者は減少したと考えられた.